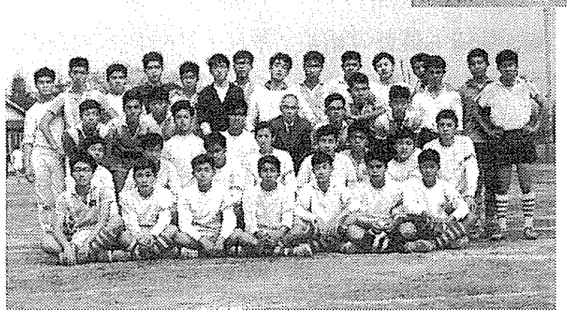
秋と春に2年連続で都大会出場

西高34期　藤谷　　健

前期（33期）は、OBの林さん、玉村さんにコーチにあたっていただき、久しぶりの地区大会優勝、都大会出場を秋、春と連続で果たしました。当時は石神井、練馬、鷺宮といった強豪が多い中での地区優勝だったので、喜びもひとしおでした。また都大会ではベスト16に入り、もう1試合で帝京との対決というところで破れたのは残念でした。個人的には、最後の試合でPK戦になり、自分がはずしたことは今でも苦い思い出です。このころはちょうど浪人していたOBも大学に入ったことや、久しぶりのフルタイムのコーチだつたこともあり、OBの練習参加は非常に多かったように記憶しています。伝説のOBが顔を出されると、「怖そうな顔しているな」「あれが○○スライディングの人だ」などとうわさをしながら、合宿や練習が盛り上がったことを覚えています。

今期（34期）は、3年が7人しかおらず、春は新入生部員の力まで借りなければなりませんでした。前期に比べ、力の差もありましたが、それでも運などが手伝い、秋、春とも地区大会で優勝し、都大会に進出することができました。西高会館での合宿はこの年が最後でした。青い空に向かって「夕立がこないかな。雷が鳴れば休めるのに」と半ば真剣に祈ったものでした。

1964年6月14日杉並区民大会 ▶
一般の部にOBチームを編成して参加、宿敵豊多摩高OBを3－0で下して優勝。



◀1965年10月10日記念祭で
現役　3－1　OB
前年の東京オリンピックの影響で1年が33名入部し部員数50名を超える大世帯となった。

「サッカーノート」

西高35期　大塚　祐貴彦

あれは2年生の冬、ノートには12月23日とあるから、2学期の期末試験も終わり、試験休み中だったのだろうか。都立永福高校と日大二高とを招いての3校戦が西高で行われた。西高と日大二高との試合は最後の第3試合だった。段々、日も陰ってきていた。薄曇りで少し肌寒くそれでいて妙に明るい、いかにも年の瀬の夕方といった感じだった。何となく気分がパッとしなかった。

私はその試合ではストッパーをしていた。その頃の私の普段のポジションはサイドバックだった。この日は、3校戦だったからなのか、普段ストッパーの上田君や土山君が居なかったからなのか、はたまた、しばらくクラブ活動はオフシーズンに入るため、各自好き勝手に普段と異なるポジションをとることにしていたのか、定かでないが、とにかく私は対外試合としては初めてストッパーの位置についた。

私のマークすべき相手は当然相手チームのセンターフォワードである。「きっと上手いだろう。気を抜いたらいかん」と力んだ。だが試合が始まってすぐ「特に上手いという感じは無いな」と何故か何の根拠も無くそう思った。これなら私でも何とかなるだろうと。

しばらくして、味方ゴール前、ペナルティエリアライン上で、ルーズボールが高くあがった。味方は校舎を背にして南向きに攻めていたので、ボールの上がった位置は体育館前の桜の木の前あたりである。それまでほとんど私の所にボールは飛んで来ていなかった。或いは試合が始まってすぐだったからかもしれない。それが相手フォワードとの最初の勝負だった。

相手の方が背が高かった。その分、私はやや強引に体を相手に預けてポジションをとるようにしてジャンプした。私は「勝った」と思った。空中でもバランスは完全に保つことが出来ていた。だが後から思えばそれが災いした。私はできるだけ遠くへクリアしようと、反らした上半身を思いっきり前に振った。しかしボールをミートする一瞬、目をつぶってしまった。

次の瞬間、額に強い衝撃を受けてそのまま私はひっくり返った。一瞬何が起こったのか判らなかった。だがすぐに相手の頭とぶつかったことに気付いた。相手は打ち所が良かったのか（石頭なのか）大したことは無さそうである。私はすぐには信じられない思いだった。あの間合いでどうして相手とぶつかるのか。直前の競り合いまでは今でも思い出すことができる。そのとき相手の頭は確かに自分の前には無かった。なのに何故・・・？。今だに不思議でならない。まるで夜、部屋の灯りが一瞬消えて真っ暗となるみたいに、接触の瞬間だけがわからないままだ。

私は無意識に痛む額に手をやった。周りを見ると、皆、私のことを見て、驚きと心配の念を顔に表している。もう間違いない。どうやら額が割れたらしい。私は抱えられるようにして桜の木のすぐ横を通り、体育館の水道口の近くで横になった。日大二高か永福かのマネージャが遠巻きにしながら、怖いもの見たさからか、いかにも重傷患者を見るような目で私の顔を覗き

込んでいる。そういえば数日前、偶然、体育の授業で、重傷患者と接する時は本人を心配させない様に平静を装うと良いという話があった。本当にその通りだと得心した。

鏡が無いので自分がどうなっているのかわからない。手で確かめようとすると、近くの誰かが雑菌が入るからとそれを制してくれた。だがますます気になるし、ますます不安が募る。するとそれを察したのか、同期の一人が、さも何でもないといった口調でしばらくそばにいて色々と話しかけてくれた。とても嬉しかった。だが、それも、それがあまりに一生懸命な態度だったので、逆に「これは、どうやら本当にひどいらしい」と内心ますます不安になってしまった。

少しして、たぶん顧問の小林先生だったと思うが、車で病院まで連れて行ってくださるという。内心、救急車が来るものと勝手に思いこんでいたから、我が儘なもので、少し“ムッ”とした。が、よく考えてみると大した傷でないのだなと安心した。汚れたユニフォーム姿のままだったのでこのまま車に乗せて頂くことに躊躇すると、先生は「ああ、いいから」といつもの静かな口調でおっしゃってくださった。私は申し訳ないと思いながらも、そのまま汚れた単パン姿で車に乗り込んだ。

西荻中央病院では脳外科に廻された。左眉のすぐ上を縦に3針縫われたことが判ったのは、家に帰って、ガーゼを外して傷口を鏡で見たときだった。

ところで東京高体連サッカー部は年度始めに表紙に「サッカーノート」と印刷された手帳の様なものを選手全員に配布していた。それは、名刺大の、緑色の表紙のついた、20頁余りの、小さなノートだった。サッカー選手の心構えに始まって、主なルールの抜粋などが掲載されていた。試合結果を簡単に記録できるように、月日、試合名、対戦チーム、得点結果、備考の各欄が用意されていた。48試合分、記録できるようになっていた。私は2年生の時、1年間の対外試合を全てこのノートに記録することにした。

今、私はそのノートを16年ぶりに開いて見ている。この昭和56年度、我々35期と36期は全部で47試合を消化した。これは前年度に比べるとかなり多い。新しくコーチに就いた鐘ケ江さんと小松さんが、試合をたくさんやったほうが強くなると考えたからだったと思う。どんな試合だったか全く思い出せないものもある。また、しばらく見ていると次第に少しずつあれこれと思い出されてくるものもある。その日の天候、グランドの状況、相手中心選手の特徴、ある一瞬のプレー、コーチとの会話、相手校の更衣室の様子、行き帰りでの同僚・後輩との語らい、相手校の最寄り駅の様子・・・・。どれも断片的でほんの2、3秒の出来事ばかりではあるが、その時の情景が、あたかも、スポーツニュースでダイジェスト版でも見るかの様に、脳裏に蘇る。

この47試合の内、実は唯一つ、得点結果を書き忘れている試合がある。それは上述の日大二高戦である。どちらが勝ったのだろう。明日は同期の結婚式で、久しぶりにみんなと会う。その時に聞いてみよう。

私の監督時代と価値観の形成

西高35期　沖　　有人

私が監督に就任したのは、お仕着せでも順番でも依頼があった訳でもなかった。大学に合格した4月に突然高校に行って「私が監督をやる」と言ったまでだ。その頃、コーチ不在が1年近く続き、チームは半年以上勝利から見放されていた。キャプテンをはじめ選手全員が途方に暮れている状態であった。そんな折なのでひとまず選手たちからは「いないよりまし」といった程度の理由で受け入れられたようだった。初めての試合で私はこう言った。「これはテストだ。試合に出すメンバーは次の試合から私が決める」。初戦は試合中に一言も話をせずに勝ちを収めた。その後も勝ち続け、大会二回戦で都大会常連に0－1で惜敗した。私は自分が考えていることが正しいことに自信を深めた。ただ、大胆な起用や戦術に選手たちは不安も多かったように思う。

次の仕事は代も替わり「いかに私を信じさせるか」であった。それは日々の結果で示すしかない。試合では数々のマジックと呼ばれるような奇跡を作り、その頃は明確に語られなかった戦術を自分の言葉で説明し理解させた。例えば、3ラインやゾーンプレスといった言葉は日本ではオフト元日本監督が現れるのを待つしかなかった。徐々に信頼を得てきたものの、エースを先発から外した時には反発が多かった。誰が見ても一番うまい選手をなぜ外すのかは説明して分かるほど簡単なことではない。ただ、公式戦で最高の結果を残すためには荒療治も辞さないのが私のやり方だ。自分がシミュレーションしてみて最高の結果になる手段を選ぶ。妥協はしない。どうしても食い下がる選手に「2ケ月後に今よりも必ずよくなる。その時にどっちがいいかもう一度聞くから、結論はその時に決めよう」と言った。2ケ月後の結果は「断然今のシステムの方が良い」という返事だった。9月、新人戦を迎え一回戦で國学院久我山（その後全国出場もしている強豪）と対戦することになった。勿論予定通り試合には勝った。相手は史上最低の成績に翌日丸坊主になっていた。しかしこの大会では都大会に出られなかった。半年前の超弱小チームには常勝チームの様な落ち着きはない。私もご多聞に漏れず、気の緩みが命取りになった。ただ勝ったことは選手ともども大きな自信となった。この自信は結果はなおさらのこと、そのプロセスを支えた価値観に対する自信になったように思う。それは、①選手は誰でも平等でチャンスがあること、②一生懸命やることが大切なこと、③正しいトレーニングを積むと勝利に近道であることの3つである。価値観を同一にできれば話は早い。その結果は国体予選に出た。勝ち負けについてその場の戦術をとやかく評論する人が多いが、勝負は試合前に決まっているものだというのが持論である。自分が率いているチームの勝ち負けは100％予測を当てたのだからこれは確かだと思う。組織はその体質の善し悪しで結果が決まる。体質とは「あたり前がどのレベルか？」が試金石となる。国体予選の試合に向かう途中私は選手と同じ電車に乗り合わせた。その際に彼らの会話が今でも印象的に記憶に残っている。

「お前、スパイク磨いてきたか？」

「当たり前だろ」
このチームの当たり前は試合前日にスパイクを磨き、勝利を願うことであるのだ。私は自分がやってきたことの価値を初めて知ったような気がした。スパイクを磨いたからといって勿論試合に勝てる訳ではない。自分さえ一度もしたことのないことが彼らには当たり前なのである。そんなチームが負ける筈がない。そうだ。自分の力を120％出して逆立ちしても勝てない相手にぶつかって燃え尽きて終わる。かっこいい。１年前は目先の試合に勝つことすらできなかったというのに。

私はコーチを２期に渡ってやらせてもらった。これまでの話は１年目の話であるが、２年目は結果的に失敗に終わった。ただ、２年目でやりたかったことは１年目のような小手先のマジックではなかった。１年目は自分でできると思うことを現実化したまでの話で私にとっては当然でしかないが、２年目はできるかできないかは分からないが成し遂げなければと考えていた。それは、自分がコーチを続けられるのは大学２年までだと考えていたので、その後のサッカー部繁栄のための基盤作り、一言で言うならば「伝統」を作りたかった。しかし、伝統は１年ではできないのは当たり前であった。この無理は選手が被ったことになるので彼らには辛かった日々かもしれない。たとえそうであったとしても先輩達の成功を見て適正な価値観だけは忘れて欲しくないと切に思っている。

私は大学時代に自分の能力の可能性と限界を実践で試し、就職して経営コンサルティング会社に入った。今は独立して事務所を構えた。今でも一番したいことの一つにサッカーの監督がある。是非、近い将来モダンで勝ち続けるサッカーをする監督として世界一になりたいと思っている、西高の監督時代に学んだ多くのことの恩返しに。

西高サッカー部の思い出

西高36期　東　美津江

ワールドカップを応援しながら、西高サッカー部の私たちの代も２トップだった、井原の位置にはＡ君がいて、中田はＢ君、中山はＣ君みたいだなあと、ついあの頃とオーバーラップさせて見てしまいました。日本のサッカーはほんとに強くなった！昔は、まさかＪリーグができるなんて思ってなかったもの。ただ当時、東京都で高校サッカー連盟に所属する高校数が、高校野球連盟数の倍以上だったので、これからは絶対サッカーが野球を越えると確信してましたが・・・・・。

私はマネージャーだったので、当時の部活動の思い出といっても、選手の人たちと見方や思いがかなり違うかもしれません。とにかく部員のみんなが一生懸命練習する姿を見ているのが好きでした。春も夏も秋も冬も・・・・。よく少女マンガにありがちな洗濯や掃除などという雑用がなかったので、毎日の日課は練習を見ることと、代表者会議に行ったり、試合の調整をしたり、スコアをつけたりという感じです。あの頃は１人しかマネージャーがいなかったんですが今はいっぱいいるのかしら？

西高サッカー部は代々強く、私たちの代も都大会ではいつもベスト８かベスト16でした。チーム構成は１人だけ後輩で、後は同期。スコアブックを見直しても、負けた試合がほとんどありません。今の高校サッカーの状況は全くわからないのですが、まだ西高は強いのですか？

振り返れば、いろんな場面場面が思い浮かびます。１番の負け試合は、関東大会での対帝京戦。相手のスピードがあまりに早く、スコアをつけるのが大変だった記憶があります。私個人としては、あれが全国高校サッカーのテレビに出ていた広瀬君か、こっちが平岡君か、などとちょっとミーハーぎみだったところもあります。

奇跡的な試合といえば、公式戦で残り２分を切って、逆転し勝ったこともありました。もうだめだと思い、見ていられず、ずっと下を向いたままの私でしたが、ホイッスルが鳴り、顔を上げるとみんな喜んでいる。最初は一体何が起こったのか、わかりませんでした。面白い試合としては、練習試合の対東大戦。大学のサークルだったのか、体育会の２部だったのか定かではありませんが、試合を申し込まれたときは、かなり驚きました。なんで東京大学が・・・大学生が西高に依頼するの？と。赤門をくぐり、本郷のキャンパス内のグラウンドでプレー、結局６対１で西高の勝ちでした。

その他、嵐の中で、背番号もわからなくなるほど泥まみれになった試合。「キーパーのユニフォームの色がグレーだと地面と区別がつかないから、他の色に着替えなさい」と言われた試合。うちのフォワードの鼻と相手キーパーの頭が激突、頭は割れて血を流し、鼻は大丈夫だったことも。エピソードはいっぱいで、書ききれないくらいです。

チームの特徴としては、試合中声も出さず、無口でひょうひょうとプレーする感じ。コーチが「あいつらは、あの不気味さがいいんだ」と良く言っていました。

みんな大好きな人たちでした。私が誇りに思った人たちでした。高校を卒業してから約15年、あの頃から２倍近く生きてしまったんですね。今はもうみんな、別々の場所で、別々の生き方をしているけれど、色々な世界で活躍していることでしょう。卒業後に会った人はわずかで、ずっと会っていない人もたくさんいます。どこか街ですれ違っても、わからないんじゃないかしら？時間（とき）が経つのはとてもはやくて、それは嬉しいことでもあり、切ないことでもあり、いろいろですね。大人になってとり戻せない時間（とき）が多くなればなるほど、切なく思うことが多くなるのでしょうか？

西高サッカー部で一緒に過ごした先輩方、同期の人、そして後輩の人たち、出逢えたことをほんとうに嬉しく思います。少しでも、思い出を共有できたことを嬉しく思います。生きていれば、またいつか、どこかできっと逢えるわよね・・・・・・。

思い出

西高37期　平野　直己

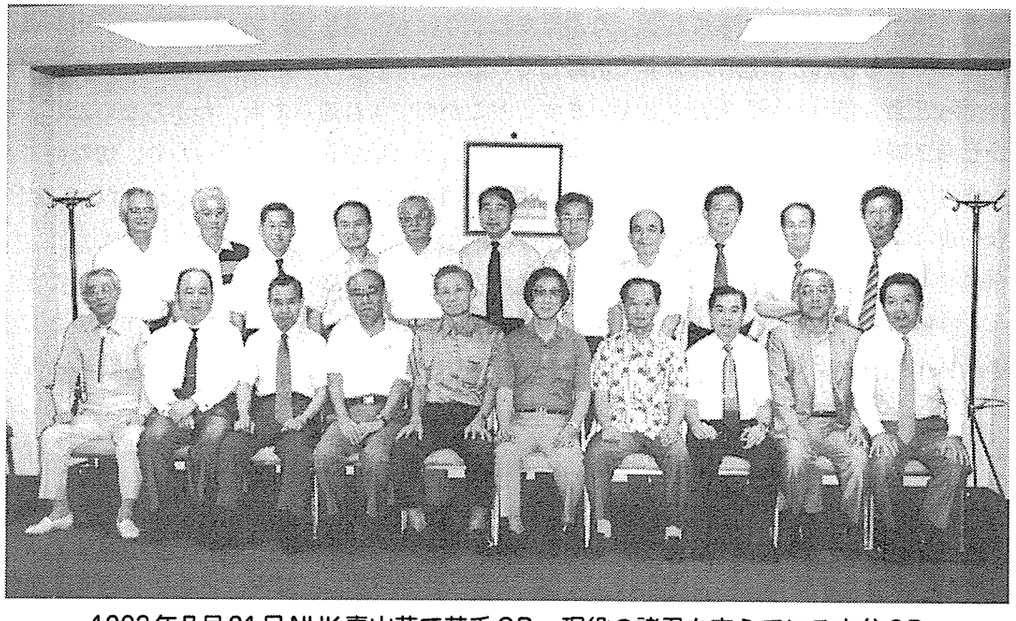
西高サッカー部創部50年おめでとうございます。

筆者にとってサッカー部を思い出すことは、青臭いナルシシズムに満ち満ちて傲慢でわがままだった思春期の自分に再び触れることです。筆者はまったく身勝手な部員で、何やかやと理由をつけては練習をさぼり、試合前になるとしゃあしゃあと部活に顔を出していました。今度の試合に筆者を出場させるかどうかについて部員内で多数決を行ったこともあったように記憶しています。

そんな筆者にどうして37期の思い出を語る資格があるでしょう。

こんな質の悪い部員を抱え、初心者も多かった37期の戦績はあまり芳しいものではありませんでした。主将の森京一君は、時にまとまりを失いがちな37期を忍耐強くまとめてくれました。また、コーチをしていただいた高橋・藤谷の両先輩もご苦労されたことと思います。

10年以上も開くことのなかった卒業アルバムを押入から引っぱり出してみると、森主将以下、石井、吉田、内田、横井、小林、飯間、室、川上、柴田、今井田、酒井、そして筆者の13名の37期サッカー部員が並んでいます。三十路を過ぎ、皆いいおやじになっていることでしょう。



1993年7月21日NHK青山荘で若手OB・現役の諸君を支えている古参OB（中7期～高6期）の結束の硬い集いが行われた。

サッカーのおもしろさ

西高38期　内門　かおり（旧姓盛）

少し前の記憶を辿っていくと、懐かしい顔やシーンが次々に浮かんできます。38期みんなの思い出も聞きたくなったので原稿を依頼したところ、6人が寄稿してくれました。それぞれの文体が懐かしく感じられるので原文のまま載せたいと思います。まずは38期の面々について須田氏のコメントから。

> やたらと口の悪い奴、やたらと下品な奴、やたらと人を殴る奴、声がやたらとバカでかい奴、試合中やたらと献身的な奴、やたらと足が短い奴、コーチに暴言を吐く奴、試合中タイムをかける奴、夕方の闇にまぎれてサボる奴、マネージャーにちょっかいだす奴、コーチが悪いと言って退部してしまう奴、成田空港が大変だと言って退部してしまう奴、元旦の練習試合が嫌で行かなかったばかりに数か月試合にだしてもらえなかった奴、最後の大会の大事な試合でけがで5分で退場してしまう奴、井の頭公園で酔っ払ってゲロで手を洗う奴、等など今思えばかわいいものですが、自分勝手なナルシストがやたらいたような気がします。（須田記）

そうそう。そして、マネージャーはこんな風に見ていました。

> 一番の思い出は雨の試合。びしょびしょで、どろどろだったけど、とっても青春していて、みんなワールドカップの選手よりもかっこよかったと思います。（中川記）
> 一番印象に残っているのは、試合のときのみんなの真剣な表情です。（西田記　旧姓達本）

うんうん、サッカーをしているときは本当にかっこよかったですね。
ここで、キャプテン浅利氏のコメントを紹介します。

> われわれ38期生の共通したところは、
> ・個性豊かな人間の集まり（はっきり言って最初はばらばらだったと思います）
> ・負けん気が人一倍強い
> ・当時コーチの沖有人先輩を憎んでいた
> ・根性練習ばっかりやっていた（これも全てコーチのせい）
> ・酒乱・バカ・サッカーの上手な人が一人もいなかったといっていいと思います。
> 練習は、はっきり言って戸塚スクール並みの厳しさがあったと思います。練習は、週に4日はあったし、当然日曜日は練習試合。休む暇がなかった覚えがあります。当然、勉強もする暇がありませんでしたね。練習試合で、沖コーチが試合前にスコアを決めて、スコ

ア通りに勝てなかったり、ましてや負けたりなんかしたら、試合後にきつい罰練習がありましたね。一部コーチと喧嘩してた奴もいたけど（須田と岩崎です）。それで上手くなったとは到底思えないのですが・・・・・・・・。

そんな我々が、昭和59年秋の新人戦で強豪國學院久我山に勝ったり、昭和60年春の総体大会で都ベスト24という※西高サッカー部史上優秀な戦績を残すことができたのは、誰の提案だったか忘れてしまいましたが、サッカー部誌をマネージャーも含めて部員全員で嫌々ながら継続してやっていたからと思います。

本来の目的は、サッカーもしくは部活のことを書くはずだったのですが、いつのまにか路線を誤ってしまい、部員の日頃思っていることや、悩んでいることや、下ネタ等を書くようになりましたね。そんなみんなの書いたことを各人が赤ペンでコメントしたりして・・・・・・。口で言えないことを部員全員がノートに残すことでお互い理解し合えて、チームが一つになり、有終の美を飾ることができたと思います。

高校野球や高校サッカーで試合に負けると泣いてる連中がいますよね。それって自分にとっては信じられないことだったけど、最後の日野台高校戦で負けたときは、本当に泣きました。試合に出れなかった島田と一緒に泣いた覚えがあります。なぜかよく分かりませんが。　（浅利記）

次に平岡氏のコメントを紹介します。

［私の高校３年間］

今思うと、クラスや教室での思い出が殆どないことに改めて驚きます。それ程サッカー部中心の生活でした。はっきりいつて体力的に少々きつかったせいもありますが、練習のない日でもいつも試合や練習のことが頭にありましたし、休み時間や放課後も部室で過ごす時間が長かったです。なぜそこまで夢中になれたのかと考えると、

１）まず何と言ってもサッカーが好きなこと。これは今でも変わりません。

２）回りの雰囲気が素晴らしかったこと。同期はもちろん、先輩・後輩、マネージャーや顧問の先生方がみな熱心で、否応なしにぐいぐい引きずり込まれるものがありました。グラウンドが改修で使えなかったとき、公園で練習したり、練習方法をめぐってコーチと喧嘩したり、ノートを回してそれぞれ思っていることを書きつづったり。上手く言葉では表現できませんが、この「熱心さ」や「盛り上がっていく雰囲気」こそサッカー部に限らず、西高の伝統と誇りだと思います。

３）青春特有のあふれ出るエネルギー。これに関しては、もうちょっと他の方面に向けられたらよかったな、とも思います。裏を返せば、それ程熱中していたということでしょう。

［現役の皆さんへ！］

上で書きました３）はまあどうでもよいとして、１）２）は世代を越えて共有されているものと勝手に信じています。もし、この信念が現実と違っていなければ、あとは特にいうことはありません。違っていたら・・・・残念だなあと思いますけど。　（平岡記）

最後に、部誌に丁寧にイラストを描いてくれていた安倍氏から。

才能も体力もなく、ただサッカーが好きというだけで飛び込んだサッカー部。周りの人に迷惑をかけたり、きつい練習についていきかねたり、いろいろとつらいことも あったけれど、今にしてみれば、とても充実した日々だったと思います。　（安倍記）

私もサッカー部で、サッカーが好きなみんなといい時間を過ごすことができました。そして、サッカーの面白さを沢山教えてもらつたんだなあ。みんなのコメントを読みながら再認識しました。

今回記念誌に原稿をということで、山本・塩川両氏に連絡を依頼したところ、飲み会の連絡になっていたというのが、最も38期らしいエピソード。また一緒に飲みたいな。

※　西高サッカー部史上優秀な戦績であったかどうかは、この記念誌全体を読んで判断して頂きたい（編集部）。

ダッシュ・ターンとインターバル

西高　39期　萩野　源次郎

我が39期は三浦先生と菅井先生に顧問をして頂き、技術面のコーチングスタッフとしては１年から３年までの間を35期の沖さんに、２年のときからは毛利さんや大塚さんらも加わり、主に35期の先輩方を中心に指導して頂いた。

その３年間の日々はまるで「沖教」とでもいえるような宗教に入信したかのようだった。というのも、我々高校生にとって当時大学生であった沖さんはやたら大人に見え、とにかく厳格で絶対的な存在であり、誰も逆らうことなど許されなかったからである。

部室で練習内容や試合の方針に対する不平、不満をいくらこぼしていても、ひとたび練習が始まり、沖さんが笛をピィーと吹けば、さっきまで文句を言っていた者もまるで操り人形であるかのように全力で走り出し、次の笛の音が耳に入ると、くるっと向きを反転させ、すぐさま再び全力疾走していた。この時、沖さんに手を抜いて走っていると判断される者がグループ内に一人でもいると、そのグループはいつまでたっても終わらないのである。これが沖さん流の「ダッシュ・ターン」であった。各部員は「あいつは一生懸命走っても、そう見えないため、あいつと組むと不利だ」というようなことをそれぞれが沖さんになったつもりで自分なりに考え、それに基づいて列を計算しながら並んでいたことを思い出す。

「沖教」にはもう一つの名物があった。それは「インターバル」である。※これは体力をつけるためには非常に効率が良いとされているトレーニング方法の一つらしいのだが、当時の

我々にはこの上もない重圧となって重くのしかかっていた。

おかしな話だが、いつでもどんなときでも練習の最後に、（いや、ときには試合の後にも）この「インターバル」があるため、そのときまでにいかに体力を残しておくかというのも我々の間では重大な問題であり、課題でもあった。

今でもはっきりと覚えているのは、２年の夏休みのことである。夏合宿を前に連日灼熱の太陽が降り注ぐ７月の末、自宅から練習に向かう猛烈に暑い道中、同期の竹山君、山西君、多田君と自分の４人で自転車のかごにそれぞれ棒のアイスを２、３本突き刺し、そのうちの１本をしゃぶりながら、「今日のインバル何本かな～？」「合宿前だし、結構多いんじゃん？」などということばかりを毎日毎日飽きもせずに話していた。

今振り返ると「そんなことが・・・」と思ってしまうが、あのときの自分にとってはその日のインバルの本数が一番の関心事であり、心配事でもあったのだ。

夏合宿中、宿舎からグランドまではワゴン車の荷台に乗せてもらったのだが、揺れる車内の雰囲気はさながら売られていく動物でも運んでいるかのようであった。運転手のお兄さんはいつも我々の愚痴ばかりを耳にしてきっと「なぜそんな思いをしてまでみんなはサッカーをやるんだろう？」と不思議に思ったに違いない。その合宿中、練習の最中に後輩の誰かが屁をこいた。大きな音がしたものの誰一人笑う者はいなかった。皆その後に控えた「インバル」のことばかりを考えており、そんなことに構っている余裕など微塵もなく、我々を取り巻く空気は完全に張り詰めていたのだ。しかし、その晩のミーティングで、毛利さんに「ああいうときは、笑え！」と言われたのに対し、「そんなこと言ったって、笑える余裕なんて誰にも残っているはずがない！」とブーブーこぼしたのを鮮明に記憶している。

夏合宿を締めくくる最終日の練習で最後のインバルを走り終えたとき、熱いものが込み上げ、目は潤んでいた。そんな自分の肩を三浦先生が軽くポンとたたいてくれた。

今となってはすべてがいい思い出である。

私にとって西高サッカー部時代の思い出といえば、公式戦で強敵久我山や駒大を破った試合などもあるが、それにも増して印象深いのは、やはり何と言っても沖さんの「ダッシュ・ターン」と「インターバル」である。

※　本来のインターバルトレーニングと沖式「インターバル」とは別のものです。（編集部）

楽しかったマネージャー時代

西高40期　石塚　由喜江（旧姓英）

思い出に残っていることを二、三書いてみます。

２年の始め、マネージャーは私の代では奥さんと私。１年生は坂本さん、篠塚さんの２名。総勢４名。

今までは普段着のまま部活に参加していましたが、「これからはマネージャーも、もっと積極的に参加しよう」と顧問の先生方からお話があり、マネージャーもジャージに着替えて参加することになりました。

スコアブックは試合の際には今までも付けていましたが、これからは毎日の練習日誌もつけることになりました。練習内容を記録し、シュート練習などの場合は部員各人のシュートの成功数を記録しました。また、練習の最後に感想なども書きました。シュート数は一定期間でまとめてシュート率なども出して部室のドアに貼って部員みんなでガヤガヤ見たのを覚えています。あのノートはどうなったのでしょうか。

部室にはちょっと薄汚い絨毯（どこからもってきたものか不明）が敷かれていました。部員の上履き、スパイク、サンダルと山のように履物が散乱していて、掃除をするとき　は、一旦、履物を全部外に出してしまわないと、どうしようもない状態でした。そこでどこからか、古いロッカーを持ってきて、改造してげた箱を作ってくれました。小田桐君、木村君だったのでしょうか。これでちょっとは綺麗になりました。

部員数は２学年合わせると40名近くにはなっていたでしょうから、上級生のみが主に利用しているといっても、あの部屋は相当、手狭でした。隣はハンドボール部の部室になっていて、ロッカーで仕切られていただけでした。ハンドボール部員がいなくなったときを見計らって、ちょっとずつちょっとずつ、仕切りのロッカーを押して、我がサッカー部の領地を拡大していったのです。（これは我々マネージャーの仕業ではありません。）３年生となって引退するころにはハンド部との差は相当なものになりました。気付いていたけど黙って我慢してくれていたハンド部のみなさん、ごめんなさい。

正規の部活動以外でも私たちの代は仲良しでした。

夏のある夜、部員から家に電話がありました。「明日部活が終わってからみんなでプールに行く。水着を持ってこい」。次の日、自転車で三鷹市営プールまで行きました。体の小さい私は、いとも簡単に足のつかないプールに突き落とされて大変な思いをしました。あれは土屋君の仕業だったのでしょうか。

引退してから、みんなで遊びに行こうということになり、埼玉県狭山にあるアスレチックパークに行きました。腕に「西高蹴球部」の刺繍入りの黒いジャージに着替え、かなり真剣にアスレチックに挑戦しました。周りの小学生に混じって、大はしゃぎ。池や川に落ちてみんなびしょびしょ。受験生とは思えない遊びようでした。その時の写真は今でも大事にとってありま

す。どれをとっても本当に楽しい思い出ばかりです。私の写真立てには、記念祭のときにユニフォーム姿でゴール前で撮った写真が今も入っています。

ドイツから

西高40期　土屋　潤二

「はじめに」

50周年記念誌ということで原稿を依頼されましたが、我々40期にとっても卒業後ちょうど10年目という意味のある年です。一口に50年と言われましても、戦後から20年以上も経ってから生まれたわたくしたちが戦後50年の奇跡の経済復興を理解する事ができないように、その半世紀を感じることは不可能なことでございます。ただ漠然と空白のままの50年という長さだけが目の前に広がっているような50年とはそんなつかみどころのない感じが致します。そういった空白を埋める意味においても、各年代の方々が昔を懐かしむ以上に、この50周年記念誌には意味があるのではと思っています。

「サッカー部の変遷」

同じ時期に球を追いかけた40期のメンバー個々人にまつわる個人的な思い出も数多くありますが、ここでは、なるべく先輩あるいは後輩にとっても当時の様子がわかるような話を選びました。

はじめに、当時のサッカー部を取り巻く体制について触れたいと思います。われわれ西高40期は、今から思えばちょうど一つの過渡期にありました。それまでの指導体制では、サッカー部OBである大学生にコーチを引き受けていただいていました。それについてはほとんど報酬がなく（交通費程度）ボランティアという形になるため、コーチを引き受けていただける、数少ない学生を探さねばなりませんでした。実際のところ、1年にわたり週3、4日拘束され、報酬もなく、負けたときにだけ批判される役割を引き受ける人間はわれわれの代にバトンタッチされる際には現れませんでした。

その頃、ほぼ時期を同じくして、サッカーが専門の菅井先生が赴任されました。西高のOBではありませんが、大学サッカー界で活躍された先生でした。指導者がいないという状況と、当時のもう一人の顧問・三浦先生の誘い、また、われわれ生徒側からの熱い要望から、遂に、指導をしていただけることになったのです。現在のサッカー部において、保健体育の先生あるいはサッカー専門の先生が部を統括することは当然のことなのかもしれませんが、部が変貌を遂げつつあるその中にいたわたくしにとっては、大変興奮させられる出来事であったのです。

嬉しくて、嬉しくて、サッカーに取り組む姿勢も本気になりました。当時流行っていたWiel Coever のドリブル・テクニックを、授業の合間の短い10分間だけでもと、屋上で後述する川澄と2人で練習したものです。向かいの校舎の3年生には、足下のボールがコンクリートの段で見えませんから、2人が狂って踊っていると笑われもしました。授業中もボールは足の間に置いたままです。どの先生もそれについては怒りませんでしたから、呆れていたのか、懐が深いのか、見捨てられていたのか、今となっては分かりません。昼休みには、北海道のテクニシャン・伊藤も交えてリフティング大会です。正直に告白しますと、この昼のリフティング練習をするまでは、右足でのみ、しかも10回前後しか出来ませんでした。それが左右関係なく何百回と出来るようになり、ボールタッチも飛躍的に上手くなりました。

そこで、新体制になって具体的に何が変わったかと申し上げますと、練習が週に3日から4日に増え、年間の試合数も増えました。また、ボールの供給も十分となり、おおよそ一人に一つが配られました。夏の河口湖合宿では、直ぐには実現されませんでしたが、女子マネージャーが同行するようになりました。我々選手側からなかなかわかりにくい部分として特筆すべきことは、菅井先生による一貫指導がはじまったことです。それにともない三浦先生の道徳的人間教育を中心とする縁の下からのサポート体制が出来上がりました。選手の方でも、我がままなわたくしをチームのキャプテンとしていただき、奥と英マネージャーあるいは部長の川澄が一歩引いてサポートする似たような体制が出来ていた気がいたします。そういった、柔軟で簡単な組織が機能いたしますと、およそ物事がスムーズに運ぶものです。わたくしの感じるところでは当時の戦う集団は上手くいっていたような気がいたします。今思うに、わたくしが走りすぎた時には、川澄にはかなり迷惑をかけたのではないでしょうか？

次に引退時期の問題です。今でも同様なのでしょうが、都立No.1として進学と部活とを分けて考えることは出来ませんでした。具体的には、事実当時はすべての仲間が春のインターハイ予選後に引退することが普通でした。わたくし事で恐縮ですが、自分自身の進路に関係して、そうすることがわたくしには出来ませんでした。そうです。後輩に実質的にバトンタッチした後も、その中でただ普通の一人の選手として夏の高校選手権予選に参加しました。結果は全くと言ってよいほど振るいませんでしたが、高校サッカーに関しては燃え尽きることが出来、大変幸せでした。また、先輩が一人残ることで大変やりにくかった41期の竹山キャプテンをはじめとする後輩諸君には、大変感謝しております。結果はどうあれ、翌年以降、幾人かが使えるチャンスを最後まで使おうと夏まで残り続けるようになり、既成事実として意味があった行動だったようです。当時青年であったわたくしの頭に、そんなことまでは思いが及んでいませんでしたが・・・

「西高のサッカー“西高スペシャル”」

さてこれより、現役の西高サッカー部員に少しでもヒントになればと思い、わたくしのサッカー観の一面を紹介します。その内容は、当然、個人的な経験論・思い出になってしまいますが、役得ということでお許し願えれば幸いです。

まず、順序が逆になりましたが、簡単に自己紹介をさせていただきます。

西高でわたくしが在籍していたクラスは理系でしたが、進学先は筑波大学体育専門学群でした。そのころの将来の夢と言えば、自分のサッカーが何処まで通用するかまず知り、そして可能性があるのならば日本リーグ（Ｊリーグなんてものは存在しませんでした）でプレーし、ないのならば高校の保健体育の教師になりたいというものでした。どちらにしてもサッカーに関わる職業に就きたいとすでに決めていました。大学卒業の際には、まだＪリーグがはじまるという確信がなかったためさっさと現役の引退を決めました。卒業後はそのまま大学院に残り、

筑波大蹴球部のコーチをやらさせていただきました。それをきっかけに、現在、指導者を目指してあるいは指導者養成の仕事に関して少しでもお手伝いできるように、ドイツのケルン・スポーツ大学にてスポーツ・サイエンスを勉強し続けています。

当時（今でも？）、サッカーの世界では誰も知らない西高からこの世界で勝負しようと考えたきっかけとなった出来事は、東京都の地域選抜の対抗戦で、帝京や暁星、本郷、堀越、國學院久我山・・・等の有名高校の選手らと一緒にプレーしたことです。その中には前年の国体で東京代表が優勝した際のメンバーも混じっていました。今でもＪリーグで活躍している選手もいますから、杉並、中野、練馬の地域を飛び越え、全国レベルをはじめてみたと言っても良いでしょう。そこで自分の短所と長所の再確認ができ、同年代のトップレベルを肌で感じられたことは大変ラッキーでした。それまでは、西高の中でしか自分のサッカーを表現する場は与えられませんでしたから、俗に言います「井の中の蛙」状態でした。

さて、甲子園球児をはじめとするほとんど全ての分野における高校生がよく口にします「同じ年代の高校生なのだから、やってやれないことはない」（わたくしも当時よく使っていました）という言葉は、大変、罪な言葉だと経験的に感じております。ある面では確かに正しい言葉なのですが、言葉がそのまま実現することは希だからです。実際のところ、指導現場において実力差を正しく評価し、それに対して対策を練っていくことは非常に難しいのです。つまり、それまでの実力差をひっくり返すのには、余りにも多くの障害がそこには存在するのです。ほとんどの選手は漠然と実力差を受けとめ、自分の将来への上達を信じ練習を続けています。しかし、相手も上達しますから、よほど上手くやらない限り技術・戦術的に追いつき追い越すのは無理です。結局時間だけが無情に流れ、差が縮むどころか広がっていたりします。そういった意味で、希望を抱かせながら結果は残酷に終わる可能性が大きいこの言葉、「同じ年代の高校生なのだから、やってやれないことはない」は若者に対して罪の存在だと思うのです。

これを我が母校「都立西高」の問題として考えてみますと、身体的能力から練習量、試合経験、サッカーをやる環境まで、ほとんど全ての面で典型的な進学校の部活動である以上、現実としてサッカー有名校に劣っています。ですから、その言葉の実現は不可能に近いかもしれません。唯一我々に残されている良い点とは、頭で考えることであり、アイディアによって練習内容を変えられるという柔軟性です。

ところで、サッカーの伝統校や強い高校では、大抵一人の強烈なカリスマ性を持った指導者がつきっきりで指導しています。ですから、身体的・技術的に優れ、あちらこちらから掻き集めてきた山ほどの生徒に休みなしで練習をさせるわけです。上手くなって当然です。勢い指導者にとっては、各々の選手が練習目的がなにかを理解したのかが重要なのではなく、試合の流れが、練習の流れが滞りなく流れたかが問題となってきます。選手側にしても「サッカーをなぜやっているのか」、「どうしてシュートしてはいけないのか」など疑問を持つこともせず、あるいはそれを許されず、ある機械の一つの歯車として仕事をこなすようになることが多いのです。なぜなら、典型的な部員100名以上の団体において、トップである指導者にとって問題を起こすことは、自分のそれまでのポジションを失うことを意味するからです。こういった指導者に必要な戦力とは、指導者自身が思い描いているサッカーを実現させるために、単純に動いてくれる選手なのです。これは、帝京だろうが清水商業や鹿児島実業、国見、市立船橋・・にしても、似た状況だと思います。ここに、大きな違いがあると思うのです。チャンスがあると思うのです。具体的には、彼らは考えてサッカーをやることがほとんど出来なくなります。受験テクニックと同じで、彼らは与えられたパターンには大変強いのですが、思考外の課題に直面したときその脆さが出てきます。ここの違いに大きなヒントが隠されていると思うのです。我々としては満遍なく技術・戦術の向上を目指すのではなく、自分にしかできないプレー、一つのポジションのスペシャリスト、西高サッカー「西高スペシャル」を創造・修得することが大切なのです。

話を少し進めますと、はやくて大学で卒業論文を書く段階ぐらいから仕事のやり方がわかるのですが、問題や違いを発見したならば正確にその状況を把握することが第一歩となります。その後、問題解決に向かって、問題解決に許される時間と条件とに問い合わせながら練り上げていくわけです。わたくしにとって、その第一歩をこの高校時代に踏み出せたことは幸運でした。もし、わたくしが仮に西高のサッカー部員ではなかったならば、恐らくサッカーを続けることはなかったでしょう。西高が弱小なチームであったことと、知的好奇心が旺盛な仲間やそうならざるをえないような雰囲気・環境とが、今日のわたくしへと導いてくれました。

ちなみに、同じようなカルチャー・ショックに似たサッカー・ショックはその後４回あります。大学での練習時(特に日本代表レベルの井原さん・中山さんらと同じグランドに立った時)、筑波大のレギュラーとして公式戦に出場した時、加茂監督率いる木村さん・水沼さん・柱谷兄弟のいた日産（現横浜マリノス）に出稽古と称して一週間余り寝泊まりを共にし、そして試合をした時、そしてヨーロッパ・サッカーを見ている今です。ショックの度にわたくしは大きく前進してきました。その都度、思考パターンは同じです。「違い」をとらえ、それから行動してきました。

ここで生意気を覚悟に、将来に大きな可能性を秘めた現役の西高サッカー部員、あるいは今もサッカーを続けているOBの方々に以下の言葉を贈りたいと思います。まず「将来に大きな可能性を秘めている」という状態に甘えるのではなく、あらゆる分野の因果関係において原因と結果とを分析・見極め、それから慎重に、そしてまた大胆に行動することです。その際の注意点として、自分が判断する時の自分自身の定規をいつも他との比較においてチェックすることです。自分の定規が狂っていると狙った成果は得られませんし、実際、正確な定規を持った人は極僅かです。チャンスはあります。狂っている定規を持った人が多い社会においては、より正確な定規を早く矯正して作り上げたひとが勝ち残ります。そのようにして動いている限り、大きな誤りや何も成果のない状態は生じないと思います。サッカーに関して具体的なことは一言も書き残しませんでしたが、どの世界でも通用するわたくしの一つの定理です。

「今思うこと」

西高サッカー部を出発点としてその後も自己の競技力向上に励んでいるうちに、次のようなことを考え出さずにはいられませんでした。まずスポーツの世界の問題として、スポーツの商業化問題、ドーピング問題、東欧崩壊で明らかになった国家の道具として利用されたスポーツなどがあります。その一方で一般的な問題として、南北問題や世界各地での紛争、人口爆発、

福祉政策、環境汚染、エネルギー問題などタイムリミットがある問題が山積みとなっております。こういった何か矛盾している世界情勢の中で、サッカーあるいはスポーツなどをしていてよいのだろうかと、次第に深く考え込むようになりました。勿論、全てが全てスポーツとは直接関係があるわけではありません。しかし、個人的にスポーツという専門からいって、歪んだスポーツに手を貸すことは目の前の溺者を見捨てることにならないだろうか、とまで当時は思っておりました。その時弱冠20歳の青年の頭には「日本サッカーの競技力向上」しかありませんでしたから、それを意味づけるためにも納得できる見解がわたくしには必要でした。そうしてたどり着いた答は、サッカーをとおして、またあらゆるスポーツ種目での運動をとおして、何か人類に貢献できないだろうかということでした。

例えばですが、スポーツにおける一流選手を目指すならば、その人の適性にあった種目を選ぶことが絶対必要条件となるでしょう。しかし、教育者としてスポーツによって心身を鍛えようという場合には、その子の心身をもっともよく鍛えられるような、そんな種目を選ぶのがよいのではないでしょうか。弱点を鍛えるスポーツとは、むしろ適性のないスポーツということになる場合もあるのです。これが「西高サッカー部」だったのです。技術がなかろうが、足が遅かろうが、指導者がいなかろうが、問題が目の前にあるとその克服や努力によって身体ばかりか人格形成にも良い影響を与えていました。このことは卒業後数年過ぎてから気付いたことです。

また、こうも考えられます。今日、人々は社会の厳しいストレスにさらされ、働く意欲ばかりか生きる意欲までも減退している人が数多くいます。そんな状況において運動は単に体力低下や運動不足病の解消のために必要があるだけではなく、人の本来的な身体的および精神的活動への欲求を蘇らせるためにも必要であるということです。ここに運動の今日的意義があるといえるのではないでしょうか。「西高サッカー部」を通過していったサッカー・マンの多くが、何かのスポーツを続け、あるいはスポーツ観戦やスポーツニュースに一喜一憂したりとスポーツに携わり続け、身体的な健康維持よりも精神衛生的に好ましい状態を保っています。そのきっかけを「西高サッカー部」はわれわれに与えてくれました。

このようにスポーツの存在意義のある一面を捉え直し、ふたたびわたくしはスポーツに立ち向かうようになりました。また、競技力向上に関して競技力の向上がスポーツの普及に役立つと一般的に捉えられている現実を踏まえ、わたしの思考は「競技力の向上」とともに「スポーツあるいは運動をとおしての人それぞれの生きがいの獲得」との２本柱へと変化しました。その具体化として、競技と一般とを問わずに研究と指導者養成とをとおして、スポーツの普及および生きがいの獲得へと日本のスポーツ界に働きかけたいと思っております。いずれにしても、今日に至っても「西高サッカー部」は、様々な問題やヒント・解答を投げかけてくれています。

「サッカー部よ、永遠なれ」

都立西高でのサッカーのわたくしの個人的位置づけは、すでに上述したように、思い出の一ページであるだけではありません。わたくしにとって西高サッカー部は、現在歩みつつある道の出発点／原点となります。わたくしは、今は取り壊された、薄茶色く汚れた部室と硬い土のグランドの上とで、仲間たちと議論しながら自分たちで問題を探り、そして解決していく方法を学びました。今はもういないと思いますが、コウモリが飛ぶ夕暮れ時、コーチの悪口を言いながら走ったり（沖さん、今では感謝しております）、仲間の引退試合となった國學院久我山戦の夜、部室に忍び込みそれぞれ自ら高校サッカーに終止符を打ったことが昨日のことのように思い出されます。練習環境や選手のレベルなどに関して、確かに、恵まれている状況ではありませんでしたが、人との縁と申しましょうか、それ以上のものを手にすることが出来ました。３年間という短い時間をサッカーという共通体験をした仲間たちは、今ではそれぞれの分野で活躍し出しています。家庭を築いた人もいます。今まで照れのため、口に出して直接感謝を述べたことがなかったので、この場を借りて礼を言います。

「同じ時期にわたくしと一緒に行動してくれて有り難う。たまたま我々の内の一人が全く不運な交通事故で亡くなりましたが、それぞれ人として生きるに値する人生を送って欲しいと願っております。わたくしの方は、なぜか君らとのあの共通体験に味を占め、大学でもそれを求め、再び同様な共通体験をし、今ではそれをもっと多くの人々に味あわせてあげたいと一人、サッカー中毒症になってしまいました。勿論、元気でやっています。仲間よ、有り難う！西高よ、有り難う！サッカーよ、有り難う！」

記念誌ということで、記憶の底から湧き出るままに、あるいは、メッセージとしてまとまりのないまま書き連ねました。歴史ある東京都立西高等学校サッカー部の一OBとして、どなたでも、年代を越え、何処かで話をしたり、一緒になってサッカーに携わり続けたいと思っております。それでは、何処かで、あるいは「西高サッカー部x周年記念誌」で再びお会いすることを楽しみにして、筆を置かさせていただきます。

我が西高サッカー部

西高41期　石川　裕載

今までのOBコーチ中心から菅井先生による指導が、２年目を迎えていました。グランドでは、菅井先生の大きなサッカー観にとまどう時もありましたが、今にして思えば、とにかく一生懸命だったと記憶しています。

当時、FWが攻め、DFが守るという役割分担から、全員で守り全員で攻めるコンパクトなサッカーに転換しつつあり、ゾーンプレス、サイド攻撃など朝早くから練習しました。
我々の41期は、成績はぱっとしませんが、大変仲が良く、充実した３年間を西高サッカー部で過ごせたことに、大変感謝しています。